卒業する諸君へ

例年なら、卒業生諸君と一堂に会して、合格証書を渡したうえで「はなむけ」の言葉を呈するところであるけれども、今年は、学園をめぐる諸般の事情をおもんばかつて、そのような卒業式はさしひかえることになつた。残念であり卒業生諸君には申し訳ないところであるが、これも、急激な時勢の変どでもいうべきか、やむをえない次第である。そこで、諸君を送るに当つての感懐の一端を紙上に托することにした。諒としていただきたい。

先ず、私は、諸君に祝意と敬意と謝意を表する。諸君が長い間の学園生活に終止符を打つてめでたく卒業されたことに祝意を表し、またよくわが大学を選んで学習を重ねられたことに敬意を表し、さらにわが大学が未完成の域を脱せず諸君の期待にそうような教学の責任を十分には果たしえなかつたにもかかわらず、学園の維持と振興に協力していただいたことに対して謝意を表する。

ところで、諸君の多くは、いま、大学という理論の世界から実社会といわれる実践の世界に進出するのであるが、現代社会はまことに複雑でいたるところに矛盾と対立が充ちているのだから、諸君は、今後さまざまな問題にぶつつかつてどのように処すべきか迷うことがあるだろう。だが、諸君は、そういう時に正邪是非善悪を判断する基準を身につけているはずである。どんな誘惑にもまけずいかなる強迫にも屈せず、自ら信ずるところをつらぬいて行く勇気ある闘士となるように心がけてもらいたい。わが大学では、清潔な教育の場としての独特なフン囲気のなかで、諸君が社会人として信頼のできるシンのある人間を自主的に形成している。諸君は、これからも自信と誇りをもつて行動する根性のある人間として生きてもらいたい。

さて、現代社会は、すべてが大量で動き大量で動かされる大衆社会となつているので、いわゆる人間疎外がはげしく個人の存在は無視され勝ちであるけれども、そのなかにあつても、諸君は、個人の力を過小に評価して自暴自棄になつてはならない。そして常に自らを省みる自己批判を怠らず、各自の個性に即応したペースで前進すべきだと思う。また「小人は同じて和せず、君子は和して同ぜず」の言葉のように、社会人として生きるうえで和すことは大切であるが、付和雷同することなく、堂々と天下の大道を活歩する大きな気持ちで生きたらよいのではあるまいか。

それにしても、現代は、世界的にも日本的にも、大きな歴史の転換期に直面している。いま展開されている学園紛争も、その一つの現われであるといつてよいであろう。もつとも、学園紛争にはそれぞれの国や民族やそれぞれの大学によつてちがう原因と様相があるのだから一様に見ることはできないが、根源的には核兵器とその運搬手段の発達によつて人類全体が不安を覚え、わけても青年学徒が未来と生命への脅威を鋭敏に感じて平和をおびやかす方向に動く現在の政治、経済、文化その他の諸体制に強く反発しているところに世界共通の原因があるのではあるまいか。だから、端的にいえば、わが校庭に立つ「わだつみ像」の象徴する不戦の誓と平和の願を貫徹することこそが、地球上の暗雲を払う唯一の道だといつてよいであろう。諸君の若いエネルギーは、諸君の未来と生命を守るために、そして世界の平和と人類の幸福を進めるために、生かされねばならない。このことを、わが学園で学んだ諸君は、いつまでも忘れないでほしいと思う。

いま、わが大学も紛争の渦中にある。去り行く諸君の胸中にはさまざまな感想や批判が充ちていることと察する。そしてこのような事態を生じたことについては、わが大学内にも時代の進運に応じえないで矛盾と対立が増大し、せつかくの体制や機構も形骸化したところが少なくないことを認めざるをえず、私も責任を感じている。しかし、われわれは、この試練に耐えながら改めるべきは改めまた新しいものを創造する勇気をもつて前進するほかはない。そして学園を去る諸君も、この激動する時代を生きぬくために、常に時代感覚を新たにして自らをみがきあげる学習を怠つてはならない。「学習は終生の業、実践に生きて理論をつらぬき、理論を究めて実践に生きる」という姿勢をいつまでも持ち続けていただきたいものである。

ともあれ、諸君は、未来への展望をいだいて学園を去つて行く。それとは逆に、私は、思い出すことの多い回顧を胸にこの学園を去つて行く。一九四五年秋、敗戦の直後に立命館学園教学の重責を担うて以来まさに二三年有余。世界も日本も大きく変転し、学園もジグザクと激しい推移の道をたどつてきた。そして私も、齢を重ねてこの三月任期満了とともに学園を去る。時勢の流れを見まもつて感慨無量。未来に生きる諸君の洋々たる前途を祝福し、諸君の自重と健康を祈つてやまない。

一九六九年三月二〇日

末川博